

フラメンコの樹

第3回

鈴木 真澄 (バイラオーラ)

Masumi Suzuki / 1958年中野生まれ。6歳でバレエ。12歳で新体操。15歳フラメンコ。18歳渡西。21歳結婚。22歳雄輔出産。23歳麻衣出産。25歳教室開設。26歳離婚。34歳雄輔渡西。36歳麻衣渡西。42歳会社設立。50歳初孫。60歳フラメンコ。俳句入門。



©GRASPANY

「何のために生きてるか？」

なんてたいしたことじゃないって。

そして、「うちの近くに小さな部屋でも借りて、お風呂は入りに来たらいいよ」「大変だろうけど、がんばりなさいね」「交通費もかかるんだからお稽古代はいらないよ」。保育園の帰りに「うちで一緒にご飯食べましょう」と誘っていたいたり、たくさんのフラメンコのビデオをいただいたり、病気の時に手伝いに来てくれたり……。生徒さんから、あのころ高級品だった枝のついたマスクメロンをいただいた時、雄輔曰く「木のついたメロンもらえて、お母さんこんなお仕事してよかったね！笑」とか、生きた車海老がおがくずにまみれて届いた時は、いっぱい新聞紙に広げて二人曰く「これ、飼おう！」とか……。たくさんの人のやさしさのおかげさまで、今も三人とも生きてます！笑

世の中なんか変だな？と思つたら、いろんなことそぎ落としてシンプルになってみる。みんなで力を合わせて、前向きに生きていくにはどうしたら良いかを考える。今回の感染症問題には、今の私たち人類のあり方自体を問われているような気がします。

昔のように人々は思いやりや感謝の気持ちを持ってしっかりとつながっているか？本当に大切なものを吟味しているか？

フラメンコも人生も一本の樹のようで、大地にしっかりと根を張り、太い幹を真っ直ぐに、枝を伸ばして、花を咲かせる。土からの栄養や太陽や空気をいただきながら生きていく……。元気で一生懸命やれば何とかなるもんなんですね！笑

うれしい事があるから生きていける。人を助けたり、人に助けられたり……。人生修行だなぁって思うけど、誰かの役に立ってたり、私がいることを喜んでくれる人がいるから物理的にも精神的にも生きてこられた。

キャベツ一個、食パン一斤またはパンの耳だけ一袋で何日持つか……。と真剣に考えてた頃、よかつたさがしをしました。雄輔と麻衣の間に寝て、「今日、よかつたことは？」と聞くと、ふてくされたように「うーん、なかった！」

と暴れんぼうの雄輔には、年中小学校に呼び出されたし、おてんぼの麻衣は小学生までに4回も骨折しているし、雄輔はいつも麻衣をいじめてたし……。心配の絶えない毎日でした。

「よかつたこと本当じゃないの？」

「うーん……」

「今日、ケンカした？」

「今日はしなかった」

「よかつたじゃない！笑」

「今日、けがした？」

「今日はしなかった」

「よかつたじゃない！笑」

そしたら出てくる出てくる、

「給食がおいしかったから、よかつた！」

「朝礼なかったから、よかつた！」

「ころばなかったから、よかつた！」

それより昔、11階に住んでて、ベランダから飛び降りようかと思つた時に迷ったのは、二人を置いていくか連れていくか……。迷いながら上を見たら星がいっぱいだったので、広い宇宙の小さな地球のちっぽけな日本のこんな片隅で悩んでる